

## 下田歌子関係書簡翻刻（二）

——三島通庸（上）——

下田歌子研究のワーキンググループでは、未公刊の下田歌子関係書簡の翻字を進めており、前回は長崎省吾との往復書簡を取り上げた。本稿はその二回目として、国立国会図書館憲政資料室所蔵『三島通庸関係文書』の下田歌子書簡を翻字する。ただし、三島通庸宛書簡は通数が多いので二回に分けて掲載したい。本稿はその一回目である。

三島通庸（天保六（一九三五）年～明治二十一（一八八八）年）は、鹿児島藩の鼓の師範の家に生まれ、尊王攘夷運動、戊辰戦争で活躍したことなどが認められ、明治四年東京府

宮	高	愛	加
木	瀬	甲	藤
孝	真	晴	靖
子	理	美	子

庁に権参事として出仕した。以降、教部大丞（明治五年十一月～明治八年十二月）、酒田・鶴岡県令、山形県令、福島県令、栃木県令を歴任し、明治十七年内務省土木局長、明治十八年に警視總監に就任した。

三島は熱心な敬神家であり、教部大丞在任時には、当代屈指の人氣戯作者であつた仮名垣魯文に『三則教の捷徑』を書かせるなど民衆教化活動に力を注いだ。その教化活動の内容とは「神・天皇・国民」の関係を、三条教則にそつて巧みな話術でわかりやすく説教すること」である。さら

には、半年で頓挫したが学校教育にも神道教化を組み込むという方針を進めた<sup>(1)</sup>。警視總監在任中の明治二十年には、高知県の民権派が言論の自由の確立、地租軽減による民心の安定、外交の回復を柱とする「三大事件建白」と呼ばれる建白書を提出し、尾崎行雄や星亨もこれに応じて民権派の団結と政府批判を呼びかけると、政府は同年十二月に保安条例を公布、三島は保安条例を執行して民権家五七〇名を東京から追放した。同年子爵に叙せられ、翌二十一年十月二三日逝去。享年五十四。

「三島通庸関係文書」は書簡と書類の部に分かれ、書簡は三島通庸の発信書簡を含め約一七〇〇通<sup>(2)</sup>存在する。本稿は三島通庸宛の下田歌子書簡四九通のうち『教育の体系』<sup>(3)</sup>にて既に翻字、刊行された十五通を除く三十四通と『教育の大系』未翻字の別紙二通を翻字する。これら翻字済みの十五通は、同書の説明によれば「下田歌子が日本史上の人物を題材として道德教科書『国のすがた』を執筆する過程で主として三島通庸宛に送った書簡および完成後その普及を依頼する明治十九年末から翌年にかけての書簡」<sup>(4)</sup>である。

下田の刊行した教科書については、山下（一九八四）<sup>(5)</sup>と山口（一九八〇）<sup>(6)</sup>が『国文小学読本』を、谷川（二〇一六）<sup>(7)</sup>が『国のすがた』を題材として論じている。特に谷川は『教育の体系』所収の十五通を含む下田歌子の書簡および周辺

の人たちの書簡をも読み込み、『国のすがた』をめぐる経過を詳述、解説しているので、教科書問題の詳細についてはそれら先行研究を参照いただきたいが、この問題については今回翻字対象とした書簡においても言及されることがあるので、教科書を巡る騒動の概略について簡単に述べておく。

華族女学校が設立された明治十八年、下田は教科書編纂に着手し、翌十九年三月には『国文小学読本』の版權を得た。この明治十九年は初代文部大臣に就任した森有礼が帝国大学令等を公布するなど様々な学校制度改革を行った年であり、教科書についても同年四月公布の小学校令より検定制度が開始された。教科書供給については、懸賞募集、民間編纂、文部省編纂の三方式併用路線を採ることとなり、さらに翌明治二十年三月に「公私立小学校教科用図書採定方法」（訓令第三号）を発し、府県教科書審査委員会制度を策定した。同年五月には、小学校の修身・作文等一部の科目に関しては教科書を用いないという方針が出され、修身教科書の検定も行わないこととなった<sup>(8)</sup>。とはいえ、教科書が採択されるためには上述の通り府県の教科書会議の審査を通過しなければならない。そこで、下田は三島に依頼して各府県の知事達に教科書会議において『国文小学読本』を推薦するよう働きかけた。しかしながら、八月

十四・十五日の両日に開催された東京府の小学校教科書審議会では採用とならず、二十四日には教科書はこの一学期は従前のまま据え置きと決定した。<sup>(10)</sup>ところが、六日後の八月三十日に「尋常小学校学科読本ノ儀ハ左ニ記載スル書籍（下田歌子ノ国文小学読本）ニ仮定相成候」との内達が府内各郡区役所に下った。<sup>(11)</sup>こうした異例づくめの採用に対し各新聞が批判的に報道するなどした結果、文部省は九月十二日に一度採択した教科書は四年間変更しないようにとの訓令（第一二二号）を道府県へ傳達し、これを受けた東京府は翌十三日に読本採用を取り消した。<sup>(12)</sup>

その後、一学期に限り使用を許すとされたものの、既に府下の諸小学校では児童から『国文小学読本』を買い上げて旧教科書を使用するという状況であった。<sup>(13)</sup>従って、谷川（前掲書）が指摘する通り、『国文教科書』は東京府下、他府県ともに教科書として採択されることはなかったと思われる。

なお、『国のすがた』について、谷川は同書を仕掛けたのは下田や高崎正風としているが、著者である物集は三島通庸から意を受けていたようである。物集は後に、明治十九年初め頃の話として、三島から日本主義の教育が必要であるから、物集著の『日本文明史』のような方針で本を書き、それを文部省から配ったらよい、まず見本として自

分が巡査に配るから簡単な本を作れと言われた、それが『国のすがた』だと述べ、内容についても三島が添削したと回想している。物集の談話をみる限り、三島は教育に関心があり、学習院改革なども考えていたようである。<sup>(14)</sup>また、前述の通り、教部大丞在任時には民衆教化活動に熱心でもあった。したがって、試作であった『国のすがた』を教科書にしようとして企てたのは下田であるにせよ、『国のすがた』の発案者が誰だったかについては、更なる検討が必要と思われる。

さて、三島通庸と下田歌子との交流はいつ頃から始まったのだろうか。『三島通庸関係文書』中、最も古いものは明治十九年四月十八日付書簡（三一八一二）であるが、三島通庸の長女園子は明治十八年の華族女学校開学当初から在籍していることからおそらくその頃には交流が始まっていたと思われる。<sup>(15)</sup>以下では、主な書簡を紹介する。

三一八―四六書簡（明治十九年五月十八日）<sup>(16)</sup>は、書肆十一堂の主人となった長谷部仲彦を三島通庸に紹介したものである。新聞報道によると、十一堂は元々名望家十一人によって設立され、社務を下田の伯父某（明石範貞―引用者）が統括し、長谷部は「名前入」、すなわち代表のような地位にあったらしい。<sup>(17)</sup>長谷部と下田がどのように知り合ったのかははっきりしないが、下田の夫猛雄が長谷部仲

彦から京橋区日吉町にある家屋を譲渡されていること<sup>20</sup>から、その付き合いは少なくとも明治十四年まで遡ることができる。

三島宛の下田書簡には知人の就職斡旋を依頼するもの<sup>21</sup>がいくつかあるが、三一八―二書簡で言及されている通り、明治十八年十二月に内閣制度が創設されるなどこの時期に行政の人員整理が進んでいたことが関係していると思われる。特に明治十九年一月の官制改革では陸海軍文官の削減が行われたので、陸軍省文官であった長谷部も転職を決めたのかもしれない。この時の行政整理には当時批判されていた藩閥情実人事の改革も目的の一つであったようである<sup>22</sup>が、そうはいっても桃天学校時代から有力者と交流のある下田にはこのような依頼も多かったのかもしれない。

三一八―二八及び二九書簡は教科書不採用に関するものである。東京府から「此一学期は先づ従前の俣に据え置く」との通達が出された翌日の明治二十年八月二十五日、下田は教科書不採用に対する不満を訴え、とりわけ府学務課長元田直の言行不一致に憤っている（三一八―二八）が、翌二十六日の書簡（三一八―二九）では一転して自分を責めている。下田にそのような心境の変化があったのは、彼女の耳に不採用に関する以下のような話が入ったからのものである。すなわち、昨年来新聞紙で報じられた下田の醜聞

が東京府内で話題になっており、教務課では、あれこれの噂が著者にあるので、それをはっきりするまでは教科書は採用しないという意味での発表だ、というものである。それを受けて下田は、教科書が採用にならなければ府庁が自分の醜聞を公認する形になると嘆いている。その上で、目下の通知であるから変更もありうるし、自分の名誉回復に関することだから一度採用になりさえすれば、後で不採用になってもいいと述べている。この書簡からは教科書採用を巡って様々な働きかけが行われていたことがうかがわれる。なお、「醜聞」に関しては、別稿研究余滴を参照いただきたい。

## 注

（1）谷川穰『明治前期の教育・教化・仏教』同朋舎、平成二十年、四〇～五〇頁。なお、三条教則とは、明治五年に教部省から達せられた「第一条 敬神愛国ノ旨ヲ体スベキ事」「第二条 天理人道ヲ明ニスベキ事」「第三条 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムベキ事」という三条からなる民衆教化の指針である。（浄土宗『新纂浄土宗大辞典』<https://jidoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E4%B8%89%E6%9D%A1%E3%81%AE%E6%95%99%E5%89%87>（二〇一四年十月十九日閲覧））

- (2) 国立国会図書館憲政資料室所蔵『三島通庸関係文書』(以下、  
『三島通庸関係文書』)  
<https://nnavindl.go.jp/kensei/jp/mishimamichitsu.html>  
(二〇二四年六月二十八日閲覧)

(3) 山住正己校注『教育の体系(日本近代思想大系6)』岩波書店、一九九〇年、二二二～二三五頁。

- (4) 前掲『教育の体系』二二二頁。ただし、『国のすがた』の執筆者は下田歌子ではなく物集高見である。

(5) 山下雅子「下田歌子編『国文小学読本の研究—明治国語教育史の一断面』『実践国文学』二五号、一九八四年、五九～七二頁。

(6) 山口典子「下田歌子伝拾遺(四)—教科書発刊をめぐる『りんどう』五号、一九八一年、十二～十九頁。

(7) 谷川穰「国のすがた」が示す姿—下田歌子の教科書『編纂』とその意味」『フートル・クリティーク・歴史と批評』九号、二〇一六年、二二～二四頁。

(8) 梶山雅史『近代日本教科書史研究』ミネルヴァ書房、一九八八年、十六頁。

(9) 「図書検定取扱沿革略」(梧陰文庫B-2976) なお、『国文小学読本』については明治二十年八月に検定を通過した(『官報』第二二四四号、明治二十年八月二十日)。

(10) 「教科書変更の影響」『朝野新聞』明治二十年九月七日。

(11) 「教科書変更の事を論ず」『朝野新聞』明治二十年九月十三日。

なお、学務課員であった大東重善によると、この唐突な方針変更の背景には森有礼の働きかけがあったようである。森郎を訪れた高崎府知事が「今度出版になった下田の読本は、国家主義の読本で、異彩を放った所がある、と云ふ様な話を、大臣より聴かされ」て、「大臣も斯う云はる、から、下田の読本を採用しては如何」という案を出したという(国民教育奨励会編『教育五十年史』民友社、大正十一年、五一～五二頁)。

(12) 『文部省命令全書 明治二〇年』文部大臣官房文書課、明治二十一年八月二十八日、三三～三三三頁。

(13) 「下田歌子小学読本の問題こゝに局を結ぶ」『読売新聞』明治二十年九月十六日。

(14) 「下田読本の採否如何」『読売新聞』明治二十年九月十六日。

(15) 谷川前掲書、三頁。

(16) 「物集高見君第一回談話」『三島通庸関係文書』五五七～一一三。

(17) 『女子学習院五十年史』女子学習院、昭和十年、七九頁。

(18) 谷川前掲書では三島通庸の六人の娘が桃天義塾・華族女学校で学んでいることを根拠に三島が福島県令から内務省土木局長に転任する明治十七年十一月頃から交流が始まった

としており、また、「園子、峰子、竹子の三人は山形から上京して、明治十五年桃天女塾に入」ったとの話もある（三島義温『三島弥太郎の手紙 アメリカへ渡った明治初期の留学生』、学生社、一九九四年、七八頁）が、現存する桃天義塾の名簿（実：出納番号〇〇六九）は明治二十六年のものであり、彼女達が華族女学校開学前の桃天学校に在籍していたかは確認できない。明治十九年一月十八日付の三島弥太郎書簡（『三島通庸関係文書』一八五一六）に園子と峰子が入塾したとの記載があり、この「塾」が桃天義塾だとすれば二人の華族女学校入学を機に交流が始まった可能性もある。

(19) 谷川（二〇一六）では、この書簡の番号を三一八一としているが、二〇二四年五月二十八日現在国会図書館で公開している『三島通庸関係文書目録』では三一八四六となっている。

(20) 「十一堂の組織」『朝野新聞』明治二十年九月八日。

(21) 長谷部の令孫である長谷部楽爾氏によると下田とは「フランスで知り合った」（『道は瓦甍に在り』中央公論美術出版、平成二十二年、二七五頁）とのことであるが、長谷部のフランス留学は明治五年から八年であり、その期間下田は国外に出ていないので間違いであると思われる。なお、長谷部は旧福井藩士で、三一八一―一書簡に出てくる下田の夫猛

雄の農商務省勤務時代（山林局御用掛准判任 彦根正三編『改正官員録 明治十六年十二月』博公書院、一四六頁）の同僚である水野行敏（旧福井藩士）と共に橋本左内の門弟筋にあたる（『橋本左内全集』景岳会、明治四十一年、例言二頁）。

(22) 「譲換願 長谷部伸彦 下田猛雄」東京都公文書館、請求番号 G12D514 及び「二等煉化家屋譲替願 下田猛雄 久保真太郎」東京都公文書館、請求番号 G12A608

なお、この家屋は下田猛雄が明治十四年三月から十二月までの九か月間月賦を支払った後、明治十五年一月に別人に譲渡された。

(23) 内閣統計局『日本帝国統計年鑑』第六回、一八八七年、九〇四―五頁。

(24) 小林和幸『近代初期の日本官僚制』『世界史のなかの帝国と官僚』山川出版社、二〇〇九年、一六三頁。

（解説・加藤靖子）

## 〔凡例〕

一、書簡は年月日順とし、続けて年不詳のものを月日順に配し、国立国会図書館憲政資料室『三島通庸関係文書目録』所載の番号を関係文書番号として記し、括弧内に実践女子大学図書館の出納番号を記した。



- 一、書簡には算用数字で通し番号を付した。
- 一、差出年には和暦を用いた。不明なものは年不詳とした。
- 一、必要な場合は編者注を付けた。
- 一、本文中の旧字は可能な限り原文通りとした。ただし、原文表記が難しい場合は常用漢字を使用した。
- 一、カタカナ記載はそのままとし、変体仮名はひらがなに直した。合字については、<sup>レ</sup>を<sup>リ</sup>を除きひらがなに直した。
- 一、本文中には適宜句読点を付し、闕字、平出は詰めた。
- 一、本文中、意味不明の箇所には(ママ)と行間<sup>レ</sup>に付した。
- 一、虫損・破損などのため判読不明の箇所は□で示した。字数が分かる場合は字数分を□で示した。判読が不確実な文字は□で囲った。

〔翻刻〕

1 明治(十九)年四月十八日 関係文書番号三一八一—二  
(二六七七)

其後は意外の無音御免し被下候。兎角御繁務のうへに御病氣もすがくとあらせられず候よし、深く御案し申上候。國の為折角御加養專一に祈り入候。先日ハ思召よらず御嬢様御不幸ニあらせられ、嘸々御愁傷の御義と恐察申上

候。一寸参堂にて御くやミも申上候筈の所、私病氣も未だ全快ならざるほどに、また父の大患にて大ニ心をいため申し候。親の病の誰しも心苦しからぬハあるまじく候へ共、ことに孤獨の身には親の生前に悦しむるに増る樂しミハ無之候を、若萬一のこと御座候ハと存候へば、誠に愚なることながら、かねてむねのミせまり申候。御察し被下候。然し一昨日よりや、宜敷かたにミ受少し心のひま出来候俟、御多忙中何とも恐入候へ共一寸願ひ上候。先日ハ田副こと御むつかしき中を御固<sup>ツ</sup>旋<sup>ズ</sup>戴き、當人ハ申に不及、私共も深く忝<sup>ハ</sup>かり御礼厚く申上候。然る所また御願ひ申上は何共恐縮の至りに候へ共、大分縣士族竹井時猷<sup>①</sup>なる者、もと亡夫が擊劔にて相しる人に候所、下田なくなり候後も何かのふしにハよく尋ねくれ候ひしが、長く御廳へ奉職致し居候所、此度の御改革にて非職に相成候よし。右ニ付未熟なる我々が非職に相成たるハ是非なけれど、新總監<sup>②</sup>が思召にたゞ一筋に精勤致するハ有たる者とだけの御か<sup>③</sup>へ<sup>④</sup>ミのミハ戴きたく、御懇意の御様子故伏而頼ミ入と涙をながして頼まれ候へば、たとへなるならぬハさて置き、私のこゝろに里かたの親族ハ御恵に預かることを願ひ、亡夫の友人ハ試ミに申入ることも致さぬといふことハ、よし人ハしらずとも心に於てまことに恥かしく候間、何共恐入候へ共右履歷書御覽だけを願ひ上候。オハ無之人なる

べくながら正直なることハまた珍らしき人と存候。若御次手もあらせられ候ハ、さきのかゝりの御役人に御たづね被下候ハ、御わかりのこと、存上候。定めて右様のこと山の如く御耳に入可申と存、まことに申入にくき義に候へ共、たゞ／＼私の心のうち御推察被下、御返しほど願ひ上候。一寸伺ひ願ひ上候積りの所、何分にも父の病氣にて餘り延引致し候ま、文して申上候。若時ありて復職にも相成候ハ、誠に有難く存上候。何も／＼御願ひのミ 早々かしこ  
四月十八日認

下田歌子

三寫様

(追而書)

尚々恐入候へども御序の折御奥様へもよろしく／＼御願ひ申上候

〔封筒表〕 三嶋様侍史 下田歌子

〔封筒裏〕 四月十八日

(1) 竹井時猷は、明治十九年三月まで警視庁陸軍少尉試補だったようである(彦根正三編『改正官員録 明治十九年上三月』博公書院、二五九頁)が、以降の官員録には掲載されていないことから非職となったのは明治十九年三月と思わ

れる。また、物集高見の友人でもあったようである(物集高量『百歳は折り返し点』日本出版社、昭和五十四年、二七五頁)。

(2) 三島通庸の警視總監就任は明治十八年十二月二十二日(『官報』第七四五号、明治十八年十二月二十三日)。

2 明治(十九)年五月十八日 関係文書番号三一八—四六(二六四二)

其後は御無さた申上候。さてハかねて一寸申上置候やに覚え候故岐阜縣令長谷部<sup>①</sup>の次男仲彦なる者少々志す事有りて此度書林十一堂の主人と相成、是迄書林の悪弊を一洗して教育の便を計り度との主意にて、兄の議官と協義の上断然官をも辞<sup>②</sup>し候よし。何卒一度拝顔を得度よしかね／＼申出候所、永田町高崎様にも早々拝顔を願ひ候様申聞候やうにとの御事故、誠に御多忙中恐入候へ共さし出し候。然し御繁忙の事ハ萬々御承知致し居候間、御不都合の折ハ幾度にも御帰りが被下べく候。此人も父に似て洋学者にハ珍らしき勤王家に御座候。委細ハ御拝芝のうへと 早々かしこ

五月十八日

三寫様 煩親展

下田歌子拝



〔封筒表〕三嶋通庸様 煩親展 下田歌子拝

〔封筒裏〕長谷部仲彦氏持参 五月十九日

(1) 長谷部<sup>はせべ</sup>惣連<sup>だんづ</sup> (一八一八—一八七三) 旧福井藩士、初代岐阜県令で在任中の明治六年に死去。

(2) 明治十九年六月三日内務省贈付の彦根正三編『改正官員録 明治一九年上六月』(博公書院、一三八頁) には陸軍省御用掛准判任として長谷部仲彦の名前が載っているのも、おそらく書簡の日付の直近に辞職したのだと思われる。兄辰連<sup>ときつら</sup>は当時元老院商工上等会員である。

### 3 明治(十九)年七月三日 関係文書番号三一八—四(二六四三)

先日は御奥様わざわざ御こし候ことに種々御頂戴物等致しまことニく恐縮ニ至り、却而不本意のことに存上候間、右様の義決して御配慮被下まじくやう願ひ上候。さてハ今日物集氏<sup>①</sup>来訪にてのはなしに、今度大学古典科の生徒卒業の者だんく有之、右は皇学をもとにて英学漢学も随分立派に出来候者有之候ニ付、諸省の編集やうの事務、殊にハ各縣学校の教授に用られ候ハ、其学脉すべて勤王愛國より起りて外国学にも渡り候者故、ひそかに國安を守る

の一端をも開くべくと存候故、何卒國の為尽力有りと  
の事、右はかねて教育者忝人なく士氣を養成するのとほし  
きをうれひ居候こと故、まことに尤もと被存候ま、何  
卒、御採用の道御考へ被下度、こと更各地中学師範校の  
教授たらハ他日大に國の為に相成可申と存、尚身分にも参  
館にて御願ひ申べくとハ申居られ候へ共、何卒御考へのほ  
ど國の為只管祈り入候。早々かしこ

七月三日

三寫通庸様侍史

下田歌子拝

(追而書)

尚々此内ながら御奥様へも御序によりしく御鶴声祈り入候

〔封筒表〕(三三) 田四國町 三寫通庸侍史 下田歌子拝

〔封筒裏〕四谷尾張町 七月三日 (消印…四ツ谷

東京・一九・七・三・ヲ)

(1) 物集高見(一八四七—一九二八) 国学者、帝国大学文科大  
学教授。旧杵築藩士物集高世の長男。伊藤博文宛明治十八  
年十二月二八日付書簡によれば、高崎正風の勧めで物集に  
面会したのが最初のものである(伊藤博文関係文書研究会

編『伊藤博文関係文書』五卷、塙書房、一九七七年、二七九頁）。下田は学校帰りには高見の家に立ち寄り、夕食を共にした後、高見から源氏物語の講義を受け、九時頃帰宅するというような交際が一年以上も続いたという（佐多翠「物集高見」『学苑』三〇〇号、昭和三十九年十二月、三二頁）。なお、物集は東條琴台に師事したことがあるようである（物集伴次郎「物集岳翁大人を偲ぶ」『國本』待十五卷四号、昭和十年四月、七七頁）。

#### 4 明治（十九）年十一月二十二日 関係文書番号三一八

##### ―三四（二六七）―

其後は意外の御無音御免し被下候。御病氣いか、と日夜御案じ申居候所、先々少しづ、御快方に趣かせられ候よし、公私の悦ひ此うへもなきことに御座候。乍然病ハ少しく癒るに勝るの語、何卒御忘れ被遊まじくと祈り入、國家の爲御自愛專一に祈り入候。私もまた少し弱り申訳なく、然し今日ハ大に快く今一兩日立候ハ、全快可致、乍憚さま御放念被下度候。さて過日物集氏来訪、深く彼省の事心配致され候。誠に我々も同感教育を思ふ者、彼かよそに聞かれ候べき、辱びて菌寒しのたとへ思はざる可からず。然るに同氏の云高崎先生<sup>①</sup>井印を次將に云々、閣下に御計り被成れ

しと思ふに、氏ハ勇氣ともしく大英断を行ふ事いかゝあらん。却而高印こそ其任にハ當り給ハめ、且又大將ハ英人なりと思ふが故に皇漢の人を加ふる至當ならずや。何卒私方閣下に申入吳よとなり。私も若し此事行ハれんにハ國の爲大に雀躍にたへぬことに候へ共、餘り婦人のたち入たる事にやと或ひハ危み、またハ神功皇后の古をかしこくも仰き奉れハ、伏而は女子の國家を傾けし例もあり、閣下に危むよしもなければ参りて申上試みると存たるに、また今夕物集氏参りて何卒一書呈しくれよとなり。彼人ハ日々其迷霧中にたちて一人暗たる心情いか計苦しかるらんと存候へハ、私の全快を待ちて延引致し候ハんも誠に忠なく信なき也と存、同意を表し合せて御尽力を願ひ上候。妙なことにて松方殿下にも御もらし申上候事ニ立至り（委細ハ御面話に申上候）候へ共、物集氏や私どもの口から出てやうに思はれてハ妙ならず、我考へ付にしていはんと彼殿下も御申しなりし。總理大臣<sup>③</sup>も余程御心配の御様子ながら今猶御考へ中の有様なり。何卒四方より相せまりて大層のくつがへり果ぬほどに取止め度ものに御座候。何卒前條御含みにて程よく御考へ御うちいでの事願ひ上候。餘ハ拝芝のうへと 早々かしこ

十一月廿二日夜認

下田歌子拝

三嶋通庸様御前に

(追而書)

尚々乍憚さま御奥様御嬢様がたにもよろしく御鶴聲願ひ上候。最早私も全快可致候。此状認めかけ候所醫者など参り餘り遅く相成御妨けと存、明朝もたせ上候。

〔封筒表〕 三田四國町 三嶋通庸様 奉煩親展 下田歌子

拝

〔封筒裏〕 四ツ谷尾張町 十一月廿三日

(1) 高崎正風 (一八三六—一九二二) 旧薩摩藩士、歌人、當時は御歌掛長、を指すか。

(2) 松方正義 (一八三五—一九二四) 旧薩摩藩士、政治家、この時期は大藏大臣。

(3) 伊藤博文 (一八四一—一九〇九) 旧長州藩士、政治家。

5 明治(十九)年十一月二十六日 関係文書番号三二八一三五(二六七二)

先日ハ御細書戴き有がたく奉拝誦候。さて其後また高崎様も御出かけのよし、仄に受給ハリ、病中さまく存じ廻

らし候へ共、まことに心にかゝり候事のミ故、昨日御退朝がけにと同御氏を煩はし一寸御立寄願ひ候所、折よくまた物集氏が高崎様と私に一寸相談致し度義出来に付兩人を訪はんとして先づ立よられたるに會し、兩人にていかゞの訳にやと問ひ候所、左之如くに御座候。昨日物集氏文部省への出勤日にて本省へ出たるに、總務局より来れとの事故早速参りたれば、次官のいふ此度服部が教科圖書檢定主幹申付られ、其事務に取かゝり候二付、チャンバレンと君と文典を書く為にしつらハれたる室入用に付、他に移すべく候へ共、御存じの通りチャンバレンハ宅にてかくとて出省もなし、君のも今に書き終る様子なれば、君ハ先づ本省に要用ならず、夫よりも大学にて和漢学教科書編纂を擔任致し居られたれハ、向後大学へ出頭のかた可然、右にてさしかへなくハ明日より大学へのみ出るといふ事を編集局長へ届けてまかで候へとのこと故、謹而命を奉じ詰所へ立帰てミれば、チャンバレンと外一人属官の机は他の小室に移し、私のハ其俣投出して本の室に在り、故に知る本省に私の出入することを忌み、ことを左右によせて遠ざけらるゝなり。然るに私拜命のミぎり大臣自ら我を招きて託するに、文典のことを以てせられ師範学校にてとゞむるをも無理に引とり、大学教授の時間をも少なくし、専ら此事を勉めよと在りたれば日夜勉強罷在候に、何の為にかゝるめにあふ

やらん。文典未だ書き終るに非ず。若し此俟にハイ、と申退きて後言するハ男子のすべきことに非ず。私ハ今より辭職と決心して益なき迢も省中の形勢を大臣に申上ん、たとひ退きて野に在りともいかに朝恩の忝きを忘れん、いかで教育に尽力せざらん、皆様の思召ハいかゞといはれたるに、高崎氏も大に御悦びにて身を捨て仁を為す人皇漢學者に一人のあるを見ず、知て不謂ハ不忠なり況んや身にふりかゝりたることなり、必ず大臣へいはるべしと御申なり。私も賛成にてすべて維新前後と違ひ日本人日本魂を忘却して勇氣に乏しく成しより文明も徒らにうハべのものになり候のに御座候、皇學者に物集其人あり、また愉快の事二御座候。然し乍大臣ハよもそれならバ引けとハいはれ申まじく候。其他またく聞出したる省中の腐敗実に見聞するも耳目のけがれに御座候。唯だく憂懼おく能ハざるハ帝室のことに御座候。右の如き私利をいとなむより外に心もなき奸臣小人に此大切なる教育を任せ置き候はんハ、今より十年を出ずして尊王をとなへ愛國をいふものハ馬鹿か狂人かといふに至り可申、閣下の如き誠忠の御方も誰か百年餘の寿を有ち給はん。我々ハ少し後れて徒らに悲憤死に至らんか。若し救ふべくは唯今計に御座候。何とか必ず御工夫あるべくとハ存候へ共、臥床寂然たゞ心中に集るものハ杞憂計にて、猶やる方なき俟に御多忙をも省ず御目を煩は

し申候。高崎氏の御咄しにこの荊をかるハ栗子山の燧道<sup>(3)</sup>を作る力が第一番なりとなり。若し其事半ケ年にてても出来候ハ、三千六百萬の蒼生が幸福に候へ共、要路の御方とてもむつかしくやと存上候。故に先日申上候御方にもと存上候<sup>(4)</sup>にて可相成ハ左様はこび候ハ、此上もなき事二御座候。申上度事ハ海山ながら病中意の如くならず御憐察被下候。然し一日、快き方に候間、乍憚さま御心易く思召被下候。早々 かしこ

御覽の上御火中被下候。尚三田殿下<sup>(5)</sup>へ御咄しのことはいかゝに候や、御序に御もらし戴き度候。幸ひに彼の殿下も御助力被下候事、國家の幸福に御座候。

十一月廿六日

下田歌子拜

三嶋通庸様 煩親拆

(追而書)

尚々乍憚さま御奥様へよろしく御鶴聲願ひ上候。早々

(封筒表) 三寫通庸様 煩親展

(封筒裏) 十一月廿六日 下田歌子

(1) 文部省参事官服部一三(明治十九年十一月二十四日付で教科書檢定主幹に任じられている『官報』一〇二三号、明治十九年十一月二十五日、二二九頁)

(2) バジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) 東京帝国大学外国人教師、『日本小文典』明治二十年四月刊行。

(3) 栗子山隧道…三島通庸が山形県令時代に推進した山形県から福島県に至る新道工事の一環として掘られたトンネルの名称(国立国会図書館「初代県令のイニシアチブと掘削作業」

[https://www.ndl.go.jp/scenery/column/tohoku/kurikoyama\\_tunnel.html](https://www.ndl.go.jp/scenery/column/tohoku/kurikoyama_tunnel.html) (二〇二四年六月十六日閲覧))

(4) 松方正義を指すか。

6 明治(十九)年十一月二十六日 関係文書番号三一八  
一三六(二六七三)

只今ハ御細書戴き有難く何も受給ハリ候。然るに今物集氏が彼大臣に面會致し一身を犠牲にして十分弊害をも談じたるに、殿下ハ格別怒られもせず、我が省に於て左様の事ハなし、唯だ御まへが餘り急に一條に道を行はしめんとするによれりとして木にもつかず水にもつかず先づなだめられた

る有様なり。さりとてまた歸るに望みて、私ハ右の訳故明日より本省へハ出まさんと申たるに慥なる答もなかりしなり。悪しと思召さバ叱りつけて免職にし給ふか、善しと思さバ採用も有るべきにと存候へ共、つまり何のかひもなかりしとなり。到底この形勢にてハとても行き申まじく、今夜ハ三田へも御出向きと伺ひ候間、一寸此よしをも合せて申上候。委細ハ高崎君及び同氏より御聞取被下度候。早々かしこ

十一月廿六日

下田歌子拝

三嶋様 煩親展

〔封筒表〕(三) 嶋通庸様 煩親展 下田歌子拝

〔封筒裏〕十一月廿六日

(1) 森有礼(一八四七—一八八九) 旧薩摩藩士、当時は文部大臣を指すか

7 明治(十九)年十二月十六日 三一八—一六(二六四四)  
『日本近代思想体系』六所載  
8 明治(十九)年十二月二十日 三一八—一七(二六四五)  
『日本近代思想体系』六所載

9 明治(十九)年十二月二十八日 三一八—八(二六四六)

『日本近代思想体系』六所載

10 明治(二十)年一月四日 三一八—一〇(番号ナシ)『日

本近代思想体系』六所載(高崎正風宛)

11 明治(二十)年二月七日 三一八—一一(二六四七)『日

本近代思想体系』六所載

12 明治(二十)年二月二十八日 三一八—一二(二六四八)

『日本近代思想体系』六所載

13 明治(二十)年三月一日 三一八—一三(二六四九)『日

本近代思想体系』六所載

14 明治(二十)年三月二日 三一八—一四(二六五〇)『日

本近代思想体系』六所載

15 明治(二十)年三月七日 三一八—一五(二六五一)『日

本近代思想体系』六所載

15 明治(二十)年三月七日 三一八—一五(二六五二)

別紙

昨夜製本の見本参り候所、餘り遅く相成候俟今朝持たせ上候。これにて御廳へをさめ候ぶんだけ御よろしくバ只今より製本にかゝり候よし故、否は御口上にて一寸此者へ御申付被下度候。代價ハ御廳へのハ非常に低く引さげ候よし故、

左様御承知被下度候。早々

三月八日

三寫様御前に

歌子

(追而書)

尚々、かりとちの分二冊はわざと他の序文もそへ不申候。是ハ伊藤山縣両大臣へ御持参にて序或ハ題字を御頼ミ被遊候折にと存上候也。

〔封筒表〕三寫通庸様□□ 下田歌子拜

〔封筒裏〕三月十日

16 明治二十年四月十日 關係文書番号三一八—一六(二六五二)

其後は意外の御無音御免し被下候。さては國の姿題字等彫刻出来ニ付御覽に入候。然るに御名まへを口述筆記とかへ候事ニ付、弟ことあちらこちら奔走致し、内務の其筋の属官へも段々頼ミかけ合候所、至急取調べ骨折可申ながら何分例のなき事故、何卒上より一聲かゝるやうに被成度との事のよし。御多忙中甚だ恐縮ながら、各大臣の御心ぞへ且



ハ彼省の官吏ハ教科書をかく云々の内規等も有之候次第故、已むを得理由出来ニ付、名まへを変へ候事を希望すといふ意味を可然御書状にても宜敷、芳川様へでも或ひハ其次位の御方にでも御遣し被下度、何分願ひ上候やうにとの御事取敢ず申上候。猶又各知事公へ御はなし被下候バ、修身科の参考書としてなるべく生徒ニもよましめ云々と御つたへなれば都合よからんと教育者輩も申居候意味を御もらしの程願ひ上候。申上度事萬縷御座候へ共其内拝芝のうへと。早々かしこ

尚何ぞ御わかりかねの義も候ハ、いつにても弟を御よび御たゞし被下度候。恐入候へ共なるべく御早く願ひ度との事ニ御座候。

四月十日

三寫通庸様 御前に

下田歌子拝

(追而書)

尚々乍憚さま御序に御奥様にもよろしく御鶴聲願ひ上候

〔封筒表〕 三寫様 侍史 下田歌子拝

〔封筒裏〕 四月十日

(1) 芳川顯正(二八四二—一九二〇)、明治二十年当時は内務次官

17 明治(二十)年四月十七日 三一八—一七(二六五三)

『日本近代思想体系』六所載

18 明治(二十)年四月二十三日 三一八—一八(二六五四)

『日本近代思想体系』六所載

19 明治(二十)年五月十八日 三一八—一九(二六五五)

『日本近代思想体系』六所載

19 明治(二十)年五月十八日 三一八—一九(二六五五)

別紙

尚々此度のことなか／＼奸謀も深く候様子故、何卒今一應御考へも願ひ度、且高崎様御咄しの様子も御聞とりのうへ何分御助言呉々も願ひ上候。早々

〔封筒表〕 三寫警視總監様 御直披

〔封筒裏〕 五月十八日 下田歌子拝

20 明治(二十)年五月二十六日 関係文書番号三一八—

二〇(二六五六)

一昨日は御授爵仰せ蒙られ御愛度公私の爲にもひそかに雀躍罷りあり候。然るに御令嬢様御けがのよし、憂喜こもく至り且悦び且驚き早速参館致し度ながら、餘り御人出入も多からんと存、わざとさしひかへ居候。さては校中の事二付、種々心配の義もこれあり色川も今日にも伺ひ候様申居、且又先日高崎さまより例の話し據なき事にてあらく同氏にハ御はなしの旨受給はり候へ共、私ハ同氏にもまだ口外致さず候間、此旨然るべく御含み被下候。餘は拝芝のうへと。早々かしこ

五月廿六日

三寫様 煩親展

下田歌子拝

(追而書)

御覽のうへハ御火中被下候

〔封筒表〕三寫様 煩親展

〔封筒裏〕五月廿六日 下田歌子拝

(1) 三島通庸は明治二十年五月二十四日、維新の功により子爵を授けられた(『官報』一一六九号、明治二十年五月二十五日)

21 明治(二十)年五月二十九日 三一八—二二(二六五七)

『日本近代思想体系』六所載

22 明治(二十)年七月一日 関係文書番号三一八—二二(二六五八)

昨日は御奥様わざく御こし被下候にあやにく参朝留守にて失礼致し恐入候。さて御嬢様の一件二付御宅へ上り候次の日にハ伊藤大臣へ参らんと存聞き合せ候所、高輪御留守のよし故、また次の日に伺ひ候へ共なほ御留守故、奥様へ一寸御咄し申上候所、なかくむつかしさうな御様子故、大ていにして立かへり、やうく昨日大臣へ御面會申上、御前様かた及びミね子様の御為、さうほう都合あしからぬやうニやうく申上、大臣も大きに御心とけ、先づそれなればともかくも當分の所ハ延ばし候方可然、先方へは私よりよきやうに申遣すべく、然し延引さへすればまたぞろいやなど、いふ説は起るまいかとの御事故、そのやうな事はあるまじくと先づほつと御答へ申置候まゝ、猶此上は何卒御前様がたよりも改めて人々の尽力にて先づ延べ候事にハ相成候故、以後両親が遣はさうと申時異論なきやうにと御さとし遊ばし度、若し又どうしても縁付はいやなど御申のやうなれば、伊藤大臣ニ對してもずるく引づり置き、

其節變を生じ候てはかたぐ相済まざる訳故、そこハ改めてよく御申聞け遊ハし候方可然やと存上候。左なくてハミね子様の私への口実ハ両親は何とも申さぬと御申候なり。よく御咄しおき被下度候。何卒此度ハ御當人をたしかめ、其うへ箇様、の手つゞきにしていつごろまでとか何とか申事は五六様へ御相談のかた可然と存上候。一寸上り萬々御咄し申上度候へ共、実ハ病後の事大試験まへにて寸暇無之、書を以遣申上候ま、尽きぬことのミ御察し被下候。誠に大臣への御咄しとゞき候迄は深く心配致し居候所、先づ大安心致し候。昨夜にも申上度と存ながら、餘り遅なはり候ま、取あへず今朝申上候。ミね子様ハ昨日も御奥様御出後はまたとけかねたること起りてやらる、ならんと泣てばかり御出にて、遅く私かへり候へばどうぞ助けよとて御むつかり故、ともかくも延び候間必ず思ひせまり給ふなどのミ申置候。左様御承知被下候。早々かしこ

七月一日朝

下田歌子

三寫御表様・御奥様御返事

(追而書)

尚々昨日ハ折角御ハからひのやうねんじ入候。大乱筆御免し被下候

〔封筒表〕三寫様御奥□□ 下田歌子拝

〔封筒裏〕七月一日朝

(1) 三島通庸二女みね(峰)子(二八七〇—一九四四)、明治

二十年七月牧野伸顕と結婚。

(2) 高崎五六(一八三六—一八九六) 明治十九年三月九日、明

治二十三年五月十九日まで東京府知事。旧薩摩藩士。

23 明治(二十)年七月二十六日 三一八—二三(二六五九)

『日本近代思想体系』六所載

24 明治(二十)年七月三十日 三一八—二四(二六六〇)

『日本近代思想体系』六所載

25 明治(二十)年八月二日 関係文書番号三一八—二五

(二六六一)

其後御病氣いかゞあらせられ候や、深く御案じ上候。御轉地後ハ少しハ御宜敷あらせられ候や伺ひ上候。私も上總へ参り候後ハ大きに宜敷、尚當月半にハ一寸也伺ひ度と存居、先日御書状に書物添候事長谷部へつたへ候所、深く有難かり居、尚當月半にハ各府縣教科書會議御座候よし故、若し人に御命じにて御認めさせ被下候なら

バそれまへに戴き度（御自らなれば御病氣中故難く御断り申上候）、何卒左様御申付の事一重に願ひ上候。何もく伺ひかたぐ御願ひ迄ニ 早々かしこ

八月二日

二白 若し御遣し被下候御文ハ留守宅へ願ひ上候

下田歌子拝

三寫樣 御前ニ

（追而書）

尚々乍憚さま御とりどり様へよろしく御鶴聲願ひ上候

〔封筒表〕〔福〕 島縣下野州塩原温泉場 三寫通庸樣 煩

親拆（消印…千葉二〇・八・四・イ …下塩原 八・五・

〔下野・塩谷〕

〔封筒裏〕 上總國山部郡北今泉村にて 下田歌子拝 八月

二日（消印…東京二〇・八・四・□）

26 明治（二十） 年八月七日 關係文書番号三一八—二六

（二六六三）

其後は御病氣いかゝあらせられ候や御案じ申上候。御轉地

後少しハ御快方に候や、折角御加養專一に祈り入候。私事ハ大きに海水相應致し快方に候ま、乍憚さま御安意被下度候。さてハ誠に度々申上何共申出憎く候へ共、同じ御書状を戴き候ならバ當月半にハ各府縣教科書の會議候間、それ迄に讀本さしおくり置度いかゝと長谷部も心配致し居候俟、若しく御代筆にて戴かれ候ハ、御状何卒東京の留守宅へ御遣し戴き度、或ひハ御留守宅へ戴きにさし上候ものや誠に恐入候へ共園子様<sup>①</sup>にても可否の御返事御戴かせ被下度、一重にねがひ上候。他の著者ハ自身自から書状をさし添各縣へ遣し候よしながら、何分女の事にてそれハ出来不申、誠に御迷惑と存ながら今一應押て御願ひ上候。何もく早々かしこ

八月七日

下田歌子拝

三寫通庸樣御申入

（追而書）

尚々福寫縣郡長も用ひ度と申居候もの御座候よし。若し知事公へ御序も在しまし候ハ、是又御一言願ひ上候

〔封筒表〕 三寫通庸樣 御申入

〔封筒裏〕 上總今泉 下田歌子拝 八月七日

(1) 三島通庸長女その(園) 子(一八六九—一九四二) 秋月左都夫と結婚。

27 明治(二十) 年八月十日 関係文書番号三一八—二七  
(番号ナシ)

日々の暑さ御格別の御障りもあらせられずや、私事も一寸東京へ立帰り候所、甘縣への御書状長谷部方迄御送り被下候由にて同氏礼に参り候間、取敢ず御礼申上候。何もく早々かしこ

八月十日

下田歌子拝

三寫様御前に

〔封筒表〕 野州塩原温泉場 三寫通庸様 御前ニ

〔封筒裏〕 東京四ツ谷 下田歌子拝 八月十日 (消印…東京〇・八・一〇・ヲ) (消印…下塩原・下野・塩谷・八・一一)

28 明治(二十) 年八月二十五日 関係文書番号三一八—二八(二六六四)

残暑なほ退き兼候へ共、弥御清榮に渡らせられ候半と深く御悦び申上候。園子様よりの御書状に少しハ御快き方のよし忝がり候。さて過日本府の教科書の事に付てハ非常に御助力被下、感佩の外無之候。然るに不思議なるハ元の言行一々相反し少しも信を置難く、閣下の御咄しの事も私の受給ハリ候とハ丸で相違致し、何か私が無理に願ひ餘議なく閣下が御口添被下候様な事を申出候。夫も本郷永田町と皆所々にて相違致し候。永田町にても私に於ても実にあの人ハ正義だけハ目違ひハ有るまじくと存候に、丸で反對の舉動いはゞ甘言を以てだまされ出し抜かれたと申すの外なく、遂に永田町にてハ色川<sup>①</sup>にも御相談相成、同氏ハ教育のうへにハ老練の事ハ世人の免す所なるに、拙著のきずも十分に評し候へ共、條理を押して一々説明し、到底これにまさる書ハ今の所にてハ決して無之と迄明言致し候へ共、彼レハ事を左右によせ知事の仰を笠に着て、既に採用不致事ニ致し候等、誠に言語同断の事に御座候へ共、既に今日に到りてハ私著の用ひらるゝと用ひられざるとハ第二段として、この事の為に大ひに永田町君をあしざまにいはせ候事共受給ハリ候へバ、実に切齒に堪不申、人心の頼むべからざるハ今に始めぬ事ながら、今年ハこれいかなる年か皆頼む所頼み難きに立いたり、空しく杞憂を懷きて只々身の不明を歎くより外は無之、尚行末も心細くのミ存候間、何分

御影を仰き申候。永田町君も閣下にハ十二分に申上よ、知事公にハ十分我道の行ハれざる事と依頼とのミ申上よ、来月ハ早々参りて閣下と御相談被遊べく、其上にていふべきハいふべし、夫迄ハ御他言御無用ニ願ひ上よとの事故、取敢ず先日の結果御報告申上候。何もく早々かしこ

八月廿五日

三寫通庸様 煩親拆

下田歌子拝

(追而書)

尚々委細申上度候へ共、何分筆のうへにハ憚り候事も多ク候故、御汲取被下候。然しいくら考へ候ても元の為には力こそなりたれ恨みを受る覚えハ露計も無之候故、何ぞ他に為にする所が出来たるならんと思惟致し候。尚御高案をのみ只管希ひ奉り候。

〔封筒表〕野州塩原温泉場 福渡戸<sup>(2)</sup>にて 三寫様 御奥へ御返事 (消印…本郷 東京二〇・八・二五・イ…下塩原)

下野・塩谷・八・二六)

〔封筒裏〕東京四谷 下田歌子 八月廿五日

(1) 色川閑士、当時華族女学校幹事兼教授。

(2) 福渡戸は三島の別荘があつた所。

29 明治(二十)年八月二十六日 関係文書番号三一八一

二九(二六六五)

残暑猶去りかね候へ共、御地ハ定めて清涼にあらせられ候半と御察し申上候。其後御病氣いかゞや御案じ申上候。今日ハ園子様とうく御帰りに相成、嚙々御淋しき御事とは又御察申上候。扱昨日も一寸元田の行違ひの事申上候所、誠に此事ニ付残念至極なる事を受給はり候。右ハ同氏が昨年来新聞昏上の醜聞を信じ居候とミえ(これハ同氏の子息代言人某等ハ先づ民権傾きのよし。夫等が種々申居候故、此春再應の新聞にて信をたしめたる者ならん也)、既に知事公にても正風君色川氏に向つて彼の醜聞を申出居たりと御咄し御座候よし、殊に甚しきハ教務課<sup>(1)</sup>とやらんにて云々の事の評判著者に有故に、その事判然せぬ程ハ採用せん事ハ不可也といふ意味にて公衆に打出候由。右ハ現に夫を聞たる某氏の尤も信ずべき者より永田町君の御聞取に相成たる也。某氏の名も御面話にハ申上べく候へ共、先達ても其本人を言たる失敗に恐れ(且ハ又聞故いさ、かにても相違有ては済ぬ故)書中故申上ず候。且先日も永田町へ参り閣下(正風君をさす)の御著なれば無論用ふべきなれ共



と申たるよし、永田町君も非常に氣の毒に思召被下、終にハ色川物集等の諸氏銘々十二分尽力致し呉れ候へ共、終に不可思議の事より碎かれて今日に立至り候ひし也。今と相成候てハ誠に始めの此書の當府に行はれざれハ此道と此志との他に及ぼすべき目的の違ふのミを遺憾に存じ候ひしケども、今日ニ至りてハ此書此府下に行はれざれば彼の醜聞を明言して府廳にて確證するといふ場合に立至り憂慮措不能、只々身の不徳を恨み候のミ、御憐察被下候。然るに又打返し考へ候へバ、畢竟元田のかゝる形状に及び候を只管にうらみ候ても始めに餘り高くかひ過たる不明の罪ハ私も幾分か負擔せざるを得ず、また公平に論じ来たれば彼翁もたゞ私を十分よく知らぬ所から実子の云ふ事を信じたりとミればこれも強てとがむべきにハ無之候へ共、永田町君と私との深く怒るゆゑんハ、たゞ彼翁の言語の餘りに相違する事の一点に御座候。而してまだ怪しむべきハ、彼翁の考へに永田町君ハ馬鹿正直だから私（歌子也）にだまされて居る也、閣下と知事公との口氣を伺察するに、私（歌子）を信用ハして御出にならぬ、然るに永田町君の口に乘りて此惡聲ある女を助けた様に世間から見られてハ、行末我志を十分に行ふ事難しと存じつめたる也。是ハ他に向ひて咄したる様子也。其動作ハ惡むべきも、御淺智は誠に憐むべきにて御座候。委曲ハ其内永田町君御出故、萬縷御聞取被

下度候。右様な訳にて其内心ハよくわかり不申候へ共、外面のしむけハ永田町君へ迎ひてハ実に不実極る事共々出来候二付、物集が同縣と云ふうちにも親しく行かひする中故、非常に心配して種々説論したりとかにて、また今一應塩原へ出かけて知事公に御面話をこふとか何とか受給ハリ候俟、餘り此度の一條至る所聞人によりて大に言語相違致し、色川ハ大議論をして怒つて引てしまふと申様な話也（同氏の精神ハ誠に感ずべく賞すべきも、かゝる事共しバく見聞致したる故に、御地にてもわざと私ハ申さざりし也）、又何事を如何様に申かも知れ不申候俟、何卒十分御含み被下、何卒、私の汚名をそゞく事と閣下と知事公ハ永田町君とハ反對にて私を御不信用也と誤認し居たる疑團を御説き被下候やう伏而祈り入候。私ハ讀本出来の節に到りてハ、わざと他縣への御助力も知事公には願ひ出ざりしハ、閣下や永田町君と違ひ、御管下直ちの教育に関し給ふ當路者なれば御迷惑にもやと考へさしひかへ居候ひし也。然るに岡山縣の學務課の人某ハ、嘗て先方よりわざ／＼尋ねて来て拙著を見度いと申込候うへにも何卒縣下へ用ひ度いが當今の御有様種々めんどもある故書記官が當地に出て居る故、彼人にも御示し賛成相成度と申出候俟、尤もと存此一事だけを幸ひに（かの書記官ハ）知事公の御しる人にて御一所に塩原へも参り居との事故、右の訳申上若し可なりと

思召さば御申聞被下たしと申上たるに、私の塩原へ参りし折あちら様から岡山の八十分に咄して置たり定めてよろし

からんと迄仰せ候に、此度彼翁が府知事の命なりと傲然として示す所大に不審に御座候も、これハ畢竟深き事にはあらで私を疑ひたると閣下と知事公との御主義と永田町君の主義と違ふから強い方に従ハでハ我心ざしを遂げまじと思ひひがめたる憐むべき小膽より出たるならんと思惟致し候へ共、前條申上候通りの汚名を流され、今更私に迎ひて言はぬ知らぬと申ハ餘り男子らしくもない残念な事と存候まゝ、彼翁の参らぬ先に今一應御含み願ひ置候。尤も閣下だけに申上候にて、此度ハ知事公へも文さし上不申、左様御含み被下候。御病中をもちへりミズ面白からぬ長文さし上、何共くく恐縮の至りに御座候へ共、誠に身の不徳不智なるより平素の忠義心少しも通り不申、徒らにさまよひ居候まゝ、只々閣下に御すがり申上候。御憐察被下候。早々かしこ

二白　すでに彼翁ハ手早くも府下に達して諸教科書中習字を除くの外ハ先づ一期従前の俣にさし置と致し候へ共、既に習字は改正するといふ事有り、只今の達しなれば如何やうにもかかり可申、本文申上候通り誠に名譽に關し候事故、其名譽を復する迄に一たん用ひられ候ハゝまた明日其書に

付て不可也とて退けられ候とも決して遺憾無之候。心中御憐察被下候。早々かしこ

八月廿六日認

下田歌子拝

三寫通庸様　煩親展

(追而書)

尚々御奥様へよろしく御願ひ申上候。此使ひの者ある所に私用有之、御近所へ参り候との事故、豫定の日を早めてもらひて一書ひそかに進呈致し候

〔封筒表〕　ミしま様　御申入

〔封筒裏〕　八月廿七日　下田歌子拝

(1) 東京府には「教務課」はなく、学務課の間違いだと思われる。

## 謝辞

本稿の翻字作業にあたっては、実践女子大学図書館所蔵の翻刻との校合を行った上、実践女子学園旧職員大塚宏昌氏のご指導ご協力を賜りました。また、国立国会図書館憲政資料室及び東京都公文書館には資料閲覧・複写をお許しいただきました。ここに深謝申し上げます。

(かとう やすこ・東京大学大学院教育学研究科

特任研究員・実践女子大学平成元年度卒業生)

(あいこう はるみ・福生市郷土資料室職員・

実践女子大学昭和五十八年度卒業生)

(たかせ まりこ・実践女子大学短期大学部教授・

実践女子大学大学院昭和六十年年度

修士課程修了)

(みやき たかこ・前秋草学園短期大学教授・

実践女子大学大学院昭和五十年年度

修士課程修了)